

# 中国語訳『源氏物語』の実態と問題

——「桐壺」を中心に——

張 培 華

## 要 旨

日本で古典中の古典と言われている『源氏物語』は、世界文学の名著として、英語、フランス語、ドイツ語、中国語などの多くの外国語に翻訳されている。しかも同じ言語の中でも様々な訳者の新たな翻訳が出版されている。そのうち、翻訳の種類が最も多いのは中国語である。現時点で見られる四種類の英語訳より、倍以上となる十数種類の中国語訳が見える。周知の如く、中国経済発展のおかげで、中国の書籍の装丁も以前より良くなっている。しかし、翻訳の中国語訳が見える。周知のと出版された新たな翻訳はどういうものなのか。これらの疑問を解くために、十種類の中国語訳『源氏物語』（二〇一八年時点）を選んで、桐壺巻を中心に、中国語訳における訳者の踏襲する実態と問題を解明してみたい。



## 一 はじめに

遡ってみると、平安時代に出来た『源氏物語』についての記述は、中国の正史の中では、すくなくとも明朝までは見えない。最初に中国へ『源氏物語』を伝えたのは、謝六逸（一八九八～一九四五）の『日本文学史』（上海開明書店一九二七）であった。初めて『源氏物語』を中国語で活字にしたのは、錢稻孫（一八八七～一九六六）である。一九五七年、彼が「桐壺」巻を翻訳して、文学誌『訳文』に載せたのである。その後、豐子愷（一八九八～一九七五）が、一九六一年、『源氏物語』の全訳を始発、四年間をかけて完成したが、翌年（一九六六）「文化大革命」が発生し、出版されず、出版は、文化大革命十年の後の八十年代初期、一九八〇年、一九八二年、一九八三年と、三回行われた。一方、台湾の林文月（一九三三～）は、一九七三年、中国語訳「桐壺」巻を公表したが、五四巻を完訳した年は、一九七八年である。それから、中国大陸では、多くの新しい全訳『源氏物語』が誕生した。二〇一八年までに、十種類が数えられる。ここでは、全訳のうち、十種類を選んで、訳者の翻訳の実態と問題を考察してみたい。十種類の訳者は以下の通りである。作者名の漢字の表記は、日本語に統一した。敬称略。豐子愷、林文月、殷志俊、梁春、姚繼中、鄭民欽、葉渭渠・唐月梅（合訳）、喬紅偉、潘蕊、王珊珊である。これらの十種類の訳者の翻訳は、論述の便宜のため、次のように呼称する。「一豊訳」、「二林訳」、「三殷訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「六鄭訳」、「七葉訳」、「九潘訳」、「十王訳」と称する。<sup>(1)</sup> また訳文の漢字の表記について、中国大陸の訳は簡体字、台湾の訳は繁体字で示す。それぞれの訳が依った『源氏物語』「桐壺」巻本文については、多くの翻訳では明示されていないため不明であるが、参考のため、ここでは新編日本古典文学全集で示す。

## 二 「野分」

まずは、古語の表現について見てみよう。『日本国語大辞典』（小学館）では、「野分」（のわき、のわけ）は、一「野の草を分けて吹き通る風の意」二百十日、二百二十日前後に吹く暴風。また、ひろく秋から冬にかけて吹く強い風をいうこともある。のわきのかぜ。のわけのかぜ。のわけ。台風。《季・秋》二「源氏物語」第二八帖の名。」後略。「野分」の表現は、桐壺巻に二回ある。のちほど詳しく見てゆくが、とりあえず「第二八帖の名」の「野分」について、十種類の中国語訳はいかがであろう。さっそく確認してみたい。

〔一豊訳〕朔風

〔二林訳〕野分

〔三殷訳〕朔風

〔四梁訳〕朔風

〔五姚訳〕朔風

〔六鄭訳〕狂風

〔七葉訳〕台風

〔八喬訳〕朔風

〔九潘訳〕朔風

〔十王訳〕朔風

以上の訳文では、台湾版の林文月は原文のまま「野分」で、豊子愷と同じように「朔風」と訳したものは他に六人いる。それは三股訳、四梁訳、五姚訳、八喬訳、九潘訳、十王訳である。六鄭訳は皆と違って、「狂风」としている。七葉訳は台風である。中国語における「朔風」、「野分」及び「狂风」の意味の違いを『中国語辞典』（伊地智善継編 白水社）から引いておく。

【朔風】shuofeng 名 朔風、北の風。　　↘怒号 hao || 朔風が吹きすぎぶ。　　↘凜冽 || 北風が骨を刺すように冷たい。

【野分】( ) の語彙はない

【狂风】kuangfeng 名 1 暴風、吹き荒れる風。　　↘驟起 || 暴風が突然吹きだした。  
2 (気象) 暴風。

また『日中辞典』（小学館）の「野分」の項目を見てみよう。【野分】は「のわけ」と「のわけ」に分けて二つある。  
のわけ【野分】从秋末到初冬刮 *east* 的大风 *da feng* : 台風 *taifeng*

のわけ【野分】↘のわけ ノン―不 *bu*, 非 *fei*. 『↘ストップ / 中途 *zhongtu* 不停 : 直达.  
『↘セクト / 无党派. 囲み ↘ 否定表現

(一三五〇頁)

(七六四頁)

(一四八七頁)

(一四八七頁)

右の二つ目「のわけ」文は『源氏物語』原文の意味と相応しくないので、省略する。一つ目「のわき」の文を訳すと「秋から初冬までの大風であり、台風である」となる。これらの文を参考にして、それぞれ「野分」に対して中国語訳を再び確認してみよう。

一 豊訳は「朔風」（北の風）であり、二 林訳は「野分」（対応現代漢語なし）であり、三 殷訳、四 梁訳、五 姚訳、八 喬訳、九 潘訳、十 王訳、六つはいずれも一 豊訳の翻訳を踏襲し、六 鄭訳は「狂风」（吹き荒れる風）と翻訳されている。既に指摘したように、「朔風」（北の風）とあるので、「野分」の意味と合致するとはいえない。「野分」に対応する中国語はないので、そのまま「野分」を表記すると、注のところに詳しく説明する必要があると思われる。注釈がなければ「野分」は中国読者には分かり難いと思われる。ちなみに、イギリスのアーサー・ウェーリーやアメリカのエドワード・ジョージ・サイデンステッカーの訳は「台風」だった。これらの分析を比べてみると、最も相応しい訳は六 鄭訳の「狂风」と七 葉訳の「台風」であろう。しかし、六 鄭訳の桐壺巻中の「野分」は別の語彙を使用している。では、次に桐壺巻の二箇所「野分」について、確認してみよう。

先ず、原文を示す。

【1】野分<sup>ゆげ</sup>だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、<sup>ゆげひのみやうぶ</sup>軋負命婦といふを遣はす。

（桐壺・二六頁）

【2】命婦、かしこにまで着きて、門<sup>かど</sup>引き入るるよりけはひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇<sup>くら</sup>にくれて臥<sup>ふ</sup>ししづみたまへるほどに、草も高くなり、野分<sup>ゆげ</sup>にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎<sup>やへむぐい</sup>にもさはらずさし入りたる。

（桐壺・二七頁）

次に、中国語訳文を示す。

【1】「一豊訳」

深秋有一天黄昏，朔风乍起，顿感寒气侵肤。皇上追思往事，倍觉伤心，便派刎负命妇赴外家存问。

（六頁）

「二林訳」

秋風颯颯，涼意襲人的時分，皇上比往常更思念亡妃，於是，派了一名刎負的命婦到更衣故里去。

（六頁）

「三殷訳」

时值深秋。一日黄昏，朔风乍起，使人顿觉寒气透骨。面对这番情景，皇上忽然忆起昔日旧事，倍觉神伤，遂派了刎负和命妇到外家存问小皇子音信。

（四頁）

「四梁訳」

深秋的一天黄昏，朔风乍起，顿感寒气侵肤。皇上追思往事，倍觉伤心。遂遣了刎负和命妇到外家探问小皇子。

（五頁）

「五姚訳」

此时正值深秋。一日黄昏，朔风袭来，透彻肌骨。皇上独处宫内，心事被触，又倍觉神伤。遂遣刎负命妇（中略）去外家探问小皇子音信。

（四頁）

〔六鄭訳〕

深秋时节，一日黄昏，朔风骤起，寒气袭人。皇上追昔抚今，倍觉思念，遂派<sup>レ</sup>初负命妇去外家探望。

（三頁）

〔七葉訳〕

一个深秋的傍晚，台风骤起，顿觉寒气逼人。皇上比往常更加缅怀故人，倍感悲戚，遂派遣<sup>レ</sup>初负命妇到桐壶更衣的娘家探望。

（七頁）

〔八喬訳〕

深秋的一天黄昏，朔风袭来，透彻肌骨。皇上不禁追忆起往事，又备觉神伤，便派<sup>レ</sup>初负命妇去外家探问小皇子音信。

（四頁）

〔九潘訳〕

此时正是深秋。有一天黄昏，朔风来袭，寒彻肌骨。皇上一个人独居宫中，追思往事，倍觉伤心。于是派遣<sup>レ</sup>初负命妇去外家探问小皇子的情况。

（五頁）

〔十王訳〕

时值深秋。一日黄昏，朔风乍起，使人顿觉寒气透骨。面对这番情景，皇上忽然忆起昔日之事，倍觉伤神，于是派了<sup>レ</sup>初负命妇到外家询问小皇子音信。



傍線を付けた部分に注意して頂きたい。それは「野分」の訳文である。

原文「野分」に対しての訳は、台湾版「二林訳」が「秋風颯颯」と翻訳されたが、厳密に言えば、「野分」の意味ではない。「二豊訳」は、卷名と同じように「朔風」とし、「三殷訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「六鄭訳」、「八喬訳」、「九潘訳」、「十王訳」には、いずれも明らかに「朔風」を踏襲している。「七葉訳」の「台風」が最も相応しいであろう。そのうち、不思議なのは「六鄭訳」である。卷名「野分」を「狂风」と翻訳したのに、なぜここでは「朔風」に変更したのだろうか。その理由はよく分からない。また、「三殷訳」と「四梁訳」の誤訳については既に先行研究で指摘されたことは言うまでもない。<sup>(2)</sup>

次に、もう一箇所「桐壺」卷の「野分」の中国語訳を確認してみよう。

前掲した【2】原文のように、その場面は命婦が着いて、庭の風景を目にした描写である。高い草が倒れた、野分の後の風景と考えられる。「草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、」に対する、それぞれ十種類の中国語訳を見てみよう。

【2】「二豊訳」因此庭草荒芜，花木凋零。加之此时寒风萧瑟，更显得冷落凄凉。

（六頁）

「二林訳」門前任由荒草叢生；如今月光依然照射其上，倍增無限淒涼。

（六頁）

「三殷訳」所以杂草丛生、花木凋零。今日寒风萧瑟，这庭院便倍显冷落凄凉。

（五頁）

〔四梁訳〕 因此庭草荒芜，花木凋零。加之此时寒风萧瑟，更显得冷落凄凉。

（五頁）

〔五姚訳〕 草木枯凋，狼藉一片了。今日寒风萧瑟，这庭院倍显冷落凄凉，

（四頁）

〔六鄭訳〕 因此庭院野草荒芜，树叶凋零，兼之秋风萧瑟，更显得冷清萧索。

（四頁）

〔七葉訳〕 不觉间，满院杂草蔓生，再加上台风的关系，庭院更显出一派落寞的荒芜景象。

（八頁）

〔八喬訳〕 因此庭院萧条，花木凋零。加之寒风萧瑟，这庭院备显冷落凄凉。

（四頁）

〔九潘訳〕 花木枯凋，狼藉处处了。加之此时寒风萧瑟，更显得格外冷落凄凉。

（五頁）

〔十王訳〕 因此杂草丛生，花木凋零。今日寒风瑟瑟，这庭院便更显冷落凄凉。

（五頁）

先ず、「二林訳」は「野分」が完全に抜けている。なぜ抜けて翻訳しなかったか。恐らく卷名と同じように「野分」のままとするなら、既に説明したように、中国語には「野分」がないため、ここで「野分」とすると、前後の文と繋

がないと考え、抜いたのではなからうか。しかしながら、「野分」が抜けたら、原文の意味が伝えられない。庭に茂る草が高くなり、台風に襲われた後の風景が見えないからである。

次に、「一豊訳」、「三股訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「八喬訳」、「九潘訳」、「十王訳」の訳文を見てみよう。注目したいところは傍線を付けた部分である。それは、「三股訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「八喬訳」、「九潘訳」、「十王訳」の六つが、「一豊訳」の「寒風」を踏襲したことが分かる。なぜなら、次の三点の証拠があるからである。一点、「一豊訳」は巻名の「野分」を「朔風」に翻訳した。従って、「三股訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「八喬訳」、「九潘訳」、「十王訳」の訳も「朔風」であった。二点、桐壺巻【1】の「野分」は、六つも「一豊訳」と同じように「朔風」と翻訳した。三点、桐壺巻【2】の「野分」は、「三股訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「八喬訳」、「九潘訳」、「十王訳」の六つも「一豊訳」の「寒風」とまったく一致しているのである。

また不思議な訳文は「六鄭訳」である。巻名「野分」は「狂風」であり、桐壺巻【1】「野分」は「朔風」であり、桐壺巻【2】「野分」は「秋風」である。原文「野分」一つしかないのに、なぜ頻繁に変わっていくのか、その理由はまったく分からない。

これらの三箇所「野分」に対して、十種類の中国語訳を比べてみると、「七葉訳」、つまり葉渭渠と唐月梅の訳は、最も原文に忠実な訳文と考える。三箇所「野分」を、しっかり「台風」と訳しているからである。

ここで気になることは、なぜ「一豊訳」は、「野分」の訳「朔風」を「寒風」に変えたのだろうか。この点について、少々追究してみたい。その理由として、一つ考えられることは、おそらく日本の現代語訳の影響を受けた可能性が高いと思われる。「一豊訳」は、「訳後記」のところで、次のように述べている。

現代日語译本亦甚多，主要者为谷崎润一郎译本、与谢野晶子译本、佐成谦太郎对本。今此中文译本乃参考各家

译注而成。

(一〇七三頁)

(参考訳文(稿者)…現代日本語訳本もまたはなはだ多い、主に谷崎潤一郎訳本、与謝野晶子訳本、佐成謙太郎対訳本である。今回の中国語訳本は各訳注を参考にして出来たものである。)

右のごとく、さつそく谷崎潤一郎と与謝野晶子及び佐成謙太郎の訳文を確認してみたい。特に桐壺卷の二箇所「野分」に関する訳文を見てみよう。先ず、桐壺卷【1】の「野分」の現代日本語訳文を引用しておく。

【1】谷崎潤一郎訳

野分のわきの風が吹いて、にわかはださわに肌寒はださむくなつた夕暮ゆげいの頃、常にも増して亡き人の上をお偲しのび遊あそばすことが多くて、  
鞆負みょうぶの命婦みょうぶというのをお遣みわしになります。<sup>(3)</sup>

与謝野晶子訳

野分のわきふうふうに風が出て肌寒はださむの覚えおぼえられる日の夕方に、平生よりもいつそう故人が思われになつて、鞆負みょうぶの命婦みょうぶ  
という人を使いとしてお出でしになつた。<sup>(4)</sup>

佐成謙太郎訳

あらし模様ようようの風が吹いて、急にうすら寒さむく感ぜられる夕暮ゆげいのけしきに、帝は、いつもより一層いろいろと更衣えんぎの事をお思おもい出でしになつて、鞆負みょうぶの命婦みょうぶというのを、更衣えんぎの里方にお遣みわしになる。<sup>(5)</sup>

引き続き、桐壺卷【2】の「野分」に関する三人の現代日本語文を引いておく。

【2】谷崎潤一郎訳

いつしか草くさが高く伸びて、野分のわきのためにいよいよ荒れた感じのする庭おとの面おもに、<sup>(6)</sup>

与謝野晶子訳

しばらくのうちに庭の雑草が行儀悪く高くなつた。またこのごろの野分の風でいつそう邸内が荒れた氣のするのであつたが、<sup>(7)</sup>

佐成謙太郎訳

庭の草も（手入れをしないために）たけが高くなり、折からのあらしで、なお一層荒れはてた感じがして、<sup>(8)</sup>以上にあげた訳文の「野分」に関する訳は、谷崎潤一郎は「野分の風」であり、与謝野晶子は「野分ふうに風が出で」である。いずれも「野分」のまま使っているのに対し、佐成謙太郎は、「あらし模様の風」と訳された。しかし、「野分1」の訳文には、「野分」の風が吹いて急に寒<sup>寒</sup>さを感じたと表している。おそらく、「一豊訳」では、北の風の「朔風」は寒いから、同じ意味で同じ語彙が重複しないよう「朔風」より「寒風」にしたのではないであろうか。これらを分析してみると、ここでは「野分」を「寒風」に訳したことは、必ずしも正しいとは言えないと思われる。しかし「三股訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「八喬訳」、「九潘訳」、「十王訳」はそのまま踏襲している。

また「一豊訳」には「花木」を意識している。原文には「草」しか見えないので、花と木は「一豊訳」の意識であろう。しかしながら、「三股訳」、「四梁訳」、「五姚訳」、「八喬訳」、「九潘訳」、「十王訳」の訳にも、いずれも「木」が出てくる。特に、「六鄭訳」は「木」を「树叶」と表現して、「樹の葉」のように詳しく表している、「六鄭訳」の「訳後記」を読むと、玉上琢彌と今泉忠義などの現代訳文を参考にしたと書かれている、ところが、玉上と今泉の訳文を確認してみると、いずれも「樹の葉」はない。

### 三 「籠物」

『日本国語大辞典』によると、「籠物」について次のように解釈されている。

かごに入れたもの。かごに入れた果物。木の枝などにつけて、献上物または儀式の時などに用いる。

右「かごにいられた果物」は、具体的にどのような果物なのか。参考のために、秋山虔・小町谷照彦編・須貝稔作図『源氏物語図典』（小学館 一九九七）では、次の五つの果物と述べている。

籠の中に柑、橘、栗、柿、梨の五菓をいられたものを「籠物」といい、儀式の際の贈り物として用意される。

（六三頁）

以上の文を見てみると、簡単に言えば、「籠物」は「果物」と繋がるであろう。しかし、十種類の中国語訳では、本当に「果物」と訳されたのか。このポイントに注目して、中国語訳を確認してみたい。まず『源氏物語』原文を取り上げておく。引用文は前同。

【籠物】その日の御前おまへの折をり櫃物びつもの、籠物こものなど、右大弁なむうけたまはりて仕うまつらせける。

（桐壺・四七頁）

右の原文を中国語の訳文に示す。特に、傍線は稿者が付けたものである。また注目するため、太字に変えたところもある。

【籠物】「一豊訳」这一天冠者呈献的肴饌点心，有的装匣，有的装筐，概出右大弁受命调制。

（一五頁）

〔二林訳〕當天源氏進獻皇上的貢物，如肴筍果籃等，都是右大辨受命準備的。

（一五頁）

〔三殷訳〕由源氏公子呈獻众人的肴饌点心，或装匣，或装筐，均由右大弁受命調制。

（八頁）

〔四梁訳〕由源氏公子呈獻众人的肴饌点心，或装匣或装筐，均由右大弁奉命調配。

（一四頁）

〔五姚訳〕由源氏公子呈獻众人之食品礼物，由右大弁负责，分別装在匣中和筐中。

（一〇頁）

〔六鄭訳〕这一天，冠者呈獻給皇上的礼物，有装在木盒里的肴饌和装在竹籠里的点心，均有右大弁奉詔監制。

（一一頁）

〔七葉訳〕这一天，戴冠者呈現到御前来的食品，有装在盒子里的点心、肴饌，还有装在籃子里的点心等等，这些食品都由宫廷助理者右大弁承命調制。

（二〇頁）

〔八喬訳〕这一天冠者呈獻的肴饌点心，装匣装筐，概由右大弁受命調制。

（二二頁）

〔九潘訳〕由源氏公子呈獻众人的食品礼物，由右大弁负责，分別装于匣中和筐中与人。

（二五頁）

〔十王訳〕由源氏公子呈獻众人的肴饌点心，或装匣，或装筐，均由右大弁受命調制。

以上の原文と中国語訳の「籠物」について、次のような三つの語彙がある。一は、「一豊訳」、「三股訳」、「四梁訳」、「六鄭訳」、「七葉訳」、「八喬訳」、「十王訳」の「点心」である。二は、「二林訳」の「果籃」である。三は、「五姚訳」と「九潘訳」の「礼物」である。これらの三つの中国語の意味と「籠物」とは同じであろうか。『中国語辞典』（白水社）で確認すると以下のようになる。

【点心】diǎn・xin **動** (ちよっとしたものを食べて腹の足しにする, おやつを食べる。)

【点心】diǎn・xin **名** (正式の食事に対し) 軽い食事, おやつ, スナック。(一般にギョーザ・シューマイ・めん類のように塩味のもの、蛋糕、やまんじゅう類のように甘いものがある。)

「果籃」の語彙は『中国語辞典』には載ってなかった。「果」の木の実と理解する。「籃」の意味は「かご」と同じものと考えられる。二つの文字を合わせて考えて、果物を入れるかごと分かってくる。「礼物」は次の通りである。

【礼物】lǐ wù 名 (个・件・份)「礼」・样「礼」, + 贈り物, プレゼント, 進物, ギフト。

以上の三つの中国語の語彙の意味を分析して見ると、「二林訳」の「籠物」に対する翻訳で「果籃」が一番近いと考えるが、果物とはつきり書いてないことから、中国読者にとって、「籠」だけと理解されるかもしれない。「五姚訳」と「九潘訳」の「礼物」の意味は幅広過ぎるので、具体的にどのようなものか分らない。「三股訳」、「四梁訳」、「六鄭訳」、「七葉訳」、「八喬訳」、「十王訳」はいずれも「一豊訳」の訳文を踏襲しているので、「点心」と表記したものである。特に注意したいことは、ゴシック字のように、「十王訳」の訳文は、「三股訳」の訳文とまったく一致していると



いうことである。これを見ると、「十王訳」は本当に自分で翻訳したものであるかという素朴な疑問が浮かび上がってくるのである。

また意外なことは、「七葉訳」も「点心」を踏襲しているということである。なぜ「一豊訳」は「点心」として訳したのか、何かヒントがあるのか。この点について、再び「一豊訳」が「訳後記」に記した三つの現代日本語訳を確認してみたい。

【籠物】谷崎潤一郎訳

その日の御前の折櫃物、籠物などは、おん後見役の右大弁が承つて調えたのでした。<sup>(9)</sup>

与謝野晶子訳

この日の御饗宴の席の折り詰のお料理、籠詰め<sup>(10)</sup>の菓子などは、みな右大弁が御命令によつて作つた物であつた。

佐成謙太郎訳

その日の、帝の御前の（冠者から献上せられた）折詰の物や籠に入れたものなどは、右大弁が仰せをうけたまわつて調製させたのである。<sup>(11)</sup>

以上の三つの現代日本語訳文の下線を付けた部分を確認してみると、特に与謝野晶子の訳文には「菓子」の語彙を用いている。これらの「菓子」の語彙は、小学館の『日中辞典』（一九九八）によると、次のように解釈されている。

かし【菓子】点心 diǎn xīn、糕点 gāo diǎn、[あめ菓子] 糖果 táng guǒ、

（二四九頁）

おそらく「一豊訳」は与謝野晶子の訳文によつて、「菓子」から「点心」を翻訳したのではないだろうか。そして、

「三股訳」、「四梁訳」、「六鄭訳」、「七葉訳」、「八喬訳」、「十王訳」の六つの訳は、いずれも「点心」を踏襲している。

#### 四 「唐櫃」

平安時代の「唐櫃」は、特別な櫃である。日本の大和櫃と違う。その異なる特徴を、再び、秋山虔・小町谷照彦編・須貝稔作図『源氏物語図典』（小学館 一九九七）の解説文で示しておきたい。

唐櫃からびつ

方形の蓋付きの箱を櫃というが、脚のないものを「大和櫃」、脚の付いたものを「唐櫃」という。唐櫃の脚は外側に反ったもので、正方形のものは各側面各一本の計四本、長方形のものは短側面各一本、長側面各二本の計六本を持つ。蓋は、被せ蓋となっているものや螺ちやうつがい番式の合わせ蓋となっているものなどがある。外面には蔣まきえ絵や螺鈿らでんなどの装飾が施されている。用途はさまざまで、雑具や衣類・禄など種々のものを収める。

（四六頁）

引用文を見てみると、「唐櫃」は足が付いている。日本の物ではない、唐からの輸入品である。『竹取物語』の中では一例見えるが、『うつほ物語』には十三例みえる。『源氏物語』桐壺巻には、この一例である。本文は次のようになる。

【唐櫃】屯食とんじき、禄ろくの唐櫃からびつどもなどところせきまで、

（桐壺・四七頁）

では、右の「唐櫃」について、果たして中国語訳は、正しく翻訳されているのか。十種類の訳を確認してみよう。

【唐櫃】

〔一豊訳〕

●此外賜与众人的屯食，以及犒赏诸官员的装在古式柜子里的礼品，陈列满前，

（一五頁）

〔二林訳〕

至於賞賜侍臣們的飯團和盛禮物的唐櫃等，更是琳瑯滿目，擺滿一地，

（一五頁）

〔三殷訳〕

■另外赏賜下僚之屯食，犒赏其他官员的礼品，都装在古式柜里，满放陈列，

（八頁）

〔四梁訳〕

●此外賜与众人的屯食，以及犒赏诸官员的装在古式柜子里的礼品，陈列庭前，

（一四頁）

〔五姚訳〕

◆另外赏賜下僚之屯食即糯米饭团，及犒赏官官之礼品，塞满大柜，四处皆是。

（一〇頁）

〔六鄭訳〕

此外，赐给下级官员的屯食以及装有丝绸的木盒，其数量之多，几乎无处摆放，

（一一頁）

〔七葉訳〕

此外赐给众人的小豆糯米饭团和赐给官员的装在唐式古色古香的箱子里的礼品，

（二〇～二二頁）

〔八喬訳〕

◆另外赏賜下僚之屯食及犒赏官官之礼品，塞满大柜，四处皆是。

（二二頁）

〔九潘訳〕

除此之外的赏賜下僚之屯食即糯米饭团，还有犒赏官官之礼品，陈列满前，途几为塞。

（二五頁）

「十王訳」■ 另外賞賜下僚的屯食，犒賞其他官员的礼品，都装在古式柜里，满放陈列，

(一四頁)

右の十種類の訳では、「二林訳」の「唐櫃」と「七葉訳」の「唐式古色古香的箱子」の訳が最も相応しいと考える。「六鄭訳」と「九潘訳」の訳文には、「櫃」が見えない、なかでも「六鄭訳」の訳は相応しくない。文字の通り、「丝绸の木盒」の意味は、「シルクな木の小箱」である。このようなものは「唐櫃」ではないだろう。残り六種類のうち、五種類の訳はすべて「一豊訳」の「古式柜子」を踏襲してきたものである。それは、「三股訳」と「十王訳」の「古式柜」であり、「五姚訳」と「八喬訳」の「大柜」であり、「四梁訳」の「古式柜子」である。ここで十分留意したいことは、冒頭文に黒いが付いた訳文はお互いに一致しているということである。すなわち●「一豊訳」と「四梁訳」の訳文はほぼ一致。■「三股訳」と「十王訳」の訳文は一致。◆「五姚訳」と「八喬訳」の訳文は一致。各訳文の出版年次からみると、これらの●■◆の前後の訳文はまったく一致していることは、いずれも後者から前者の訳文を踏襲していたのだろう。なぜ踏襲しなければならないのか、おそらく自分で訳すのが面倒だからだろう。

次に、「一豊訳」は、「唐櫃」を「古式柜子」と翻訳したことについて分析してみたい。文字の「古式」は、古い様式を意味するので、うしろに付けた「柜子」とは、白水社『中国語辞典』によると、次のような解釈がある。

【柜子】 gǔi・zi 名 (‘个’、十) 戸棚、たんす、水屋、キャビネット。

(四九八頁)

ちなみに、中国語簡体字で書いた「柜」は、もともと「櫃」の省略字であるので、意味は同じである。なぜ「一豊訳」は、「櫃」の前に「唐」を使わなかったのか、実際、「唐櫃」は、前に述べたように、「大和櫃」と違って、脚が付いたものであるから、「二林訳」と同じにすれば、訳さなくても、「唐櫃」のまま、使えば中国読者にとっては、分

かりやすいと考える。しかし、「一豊訳」は、「唐」を使わず、「古式」を用いたのである。そうすると、「古式柜子」は、中国の物か日本の物かよく分からない。また「古式」を使う場合、注釈に説明することが必要であろう。ところが、「一豊訳」は、当該する訳文に注釈がなかったのである。ちなみに、この「唐櫃」の英訳にも、「唐」としつかり翻訳しているのである。例えば、サイデンステッカーの訳は、「Chinese chests」であった。英訳は相応しい翻訳と言えるだろう。なぜ「一豊訳」は「唐」を使わず、注釈もしなかったのか。この点を解明するためには、やはり「一豊訳」の「訳後記」に示した現代日本語訳本：谷崎潤一郎訳本、与謝野晶子訳本、佐成謙太郎対訳本を確認してみたい。

佐成謙太郎は「唐櫃」、谷崎潤一郎が「韓櫃」。のちほど『潤一郎訳源氏物語』には「韓櫃」を「唐櫃」に変更した。与謝野晶子の訳は「箱」である。また興味深いのは、「絹」も箱に入っているそうであるが、「絹」はどこから出てきたのか、原文にはないことは事実である。

これらの現代日本語の訳文は、「一豊訳」に影響を与えていないと思われる。「古式柜子」は「一豊訳」の独自の訳文である。したがって、他の同様の訳は、「一豊訳」を踏襲した翻訳である。

## 五 「和歌」

周知の如く、桐壺巻の第一首の和歌は、源氏の母が詠んだ和歌である。和歌の本文は次のようである。

【和歌】 かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

では、この和歌は中国語でどのように翻訳されたのか。引き続き、十種類の訳文を取り上げて比べてみたい。

（桐壺・二三頁）

【和歌】「一豐詠」 面临大限悲长别，留恋残生叹命穷。

（三頁）

「二林詠」 生有涯兮離別多，誓言在耳妾心苦，命不可恃將奈何！

（四頁）

「三股詠」 ● 大限来时悲长别，残灯将尽叹命穷。

（二頁）

「四梁詠」 ● 大限来时悲长别，残灯将尽叹命穷。

（三頁）

「五姚詠」 大限已至悲永别，残灯将尽叹命穷。

（三頁）

「六鄭詠」 大限终临悲长别，身虽恋世命愿去。

（三頁）

「七葉詠」 大限来临将永别，依依真情恨命短。

（五頁）

「八喬詠」 大限已至悲永别，留恋残生叹命穷。

（三頁）

「九潘詠」 大限已至伤永诀，残灯将尽哀命尽。

（三頁）

「十王訳」 ●大限来时悲长别，残灯将尽叹命穷。

（三頁）

右の「二林訳」の訳文は、「一豊訳」の七言で二句の構造ではなく、中国語古文の助詞「兮」を使って、中国の古代詩の形を取っているそうである。ここで考察する問題は、三十一文字の和歌を、どのように中国語で翻訳すれば正しいのかと言う点ではなく、「二林訳」以外の九種類の訳文における踏襲する問題を明らかにすることである。

念のため、そのうち完全一致している訳文が見える。それは「三股訳」と「四梁訳」及び「十王訳」である。

「三股訳」 ●大限来时悲长别，残灯将尽叹命穷。

「四梁訳」 ●大限来时悲长别，残灯将尽叹命穷。

「十王訳」 ●大限来时悲长别，残灯将尽叹命穷。

三書の出版年次からみると、「三股訳」の初版は一九九六年で、「四梁訳」の初版は二〇〇二年で、「十王訳」の初版は二〇一七年である。無論、「十王訳」は「三股訳」と「四梁訳」を踏襲したものである。「三股訳」と「四梁訳」が写すことは不可能。不思議なことは、十数年前にすでに「三股訳」と「四梁訳」の訳と「一豊訳」が似ている問題は指摘されている（本稿注（3）に参考）、にもかかわらず、十数年後、「十王訳」のように、いまだに「三股訳」と「四梁訳」を踏襲している。中国語訳『源氏物語』の問題は、やはり踏襲を重ね悪循環としか言えない状態である。前掲した和歌の訳について、「二林訳」を除外して、他の八種類の訳は、実に「一豊訳」を踏襲したものか、もう一度確かめてみたい。特に手作業の文字変更「↓」に注目したい。

「一豊訳」 面临大限悲长别 留恋残生叹命穷 【中国語訳原文】

「三股訳」 大限来时悲长别 残灯将尽叹命穷 【一豊訳】を踏襲 面临↓来时 留恋残生↓残灯将尽】

〔四梁訳〕 大限来时悲长别 残灯将尽叹命穷 〔一豊訳〕と 〔三梁訳〕を踏襲  
 〔五姚訳〕 大限已至悲长别 残灯将尽叹命穷 〔一豊訳〕と 〔三梁訳〕を踏襲 来时↓已至  
 〔六鄭訳〕 大限终临悲长别 身虽恋世命愿去 〔一豊訳〕と 〔三梁訳〕を踏襲 来时↓终临  
 〔七葉訳〕 大限来临将永别 依依真情恨命短 〔一豊訳〕と 〔三梁訳〕を踏襲 面・悲长↓来・将永  
 〔八喬訳〕 大限已至悲长别 留恋残生叹命穷 〔一豊訳〕と 〔五姚訳〕を踏襲 上同 〔五姚訳〕下同 〔一豊訳〕  
 〔九潘訳〕 大限已至伤永诀 残灯将尽哀命尽 〔五姚訳〕を踏襲 悲长别↓伤永诀  
 〔十王訳〕 大限来时悲长别 残灯将尽叹命穷 〔三股訳〕と 〔四梁訳〕を踏襲 ひやくパーセントコピー

文学翻訳は難しい。古典文学翻訳はもっと難しい。これは誰でも知っている常識の常識であろう。ある中国の有名な大学教授の名言を思い出した。彼は「翻訳に手を出したら、永遠に大学の教授にはなれない」と言われた。おそらく彼にとって、文学翻訳は中国では学術レベルが低いという現状であろう。しかし、翻訳は止まらない。古典文学でも新たな翻訳は続々世の中に出てくるのである。同じ古典名著でもいろいろな翻訳者が挑戦している。これは古典文学の翻訳の魅力であろう。ここでは、中国語に踏襲訳を見た桐壺巻の第一首の和歌についての日本現代語訳の十種類を取り上げておきたい。日本の翻訳者が如何に翻訳されているのか、鑑賞してみたい。冒頭文の数字は稿者が付けた。

① 島津久基『釋評源氏物語』巻一（中興館 一九四三）

これが此の世の限りと死に別れて行くのは、ほんたうに悲しいもの。それにつけても、生きてゐたいのは、この命（いのち）です。



② 佐成謙太郎『對訳源氏物語』卷一（明治書院 一九五一）

今日を最後としてお別れします門出の悲しいのにつけて、いつまでも生きていたいと思うのは、人の命でございます。

（七頁）

③ 玉上琢彌『源氏物語』第一卷桐壺ノ若紫（角川ソフィア文庫 一九六四）

今を限りとしてお別れしますこの悲しさ、お別れせず生きながらえとうございます。ほんにこんなことと存じておりましたら。

（二一七頁）

④ 今泉忠義『源氏物語』全現代語訳（二）（講談社学術文庫 一九七八）

これを最後として、お別れ申して旅立ちますのが悲しいにつけても、生きながらえていたいの命でございますことです。

（二四頁）

⑤ 円地文子『源氏物語』卷一（新潮社 一九八六）

今を限りとお別れしなければならない死出の道の悲しさ、何とかして生きていとうございます。

（二三頁）

⑥ 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『源氏物語』新編日本古典文学全集（小学館 一九九四）

今は、それが定めとお別れしなければならない死出の道が悲しく思われますにつけて、私の行きたいのは生きる道のほうでございます。

⑦ 瀬戸内寂聴『源氏物語』巻一（講談社 一九九七）

（一二三頁）

今はもうこの世の限り

あなたと別れひとり往く

死出の旅路の淋しさに

もつと永らえ命の限り

生きていたいと思うのに

⑧ 林望『謹訳 源氏物語』一（祥伝社 二〇一〇）

（一二二頁）

しよせん限りのある命ゆえ、こうして別れていく道の悲しいにつけても、いきたいのは死出の旅路ではなくて、この命をこそいききたいのでございますものを

（一二五頁）

⑨ 中野幸一『正訳 源氏物語 本文対照』第一冊（勉誠出版 二〇一五）

今は限りとお別れする死出の道の悲しさにつけましても、私のいきたいのは、行きたい命なのでございます。

（二〇頁）

⑩ 角田光代『源氏物語』上（河出書房新社 二〇一七）

定められたお別れの道を悲しく思います、私の行きたいのはこの道ではなく、生きていく道ですのに。

（二二頁）

右の十種類の訳文を読んでみてもわかるように、実に古典文学の翻訳は面白い。まさに十人十色である。訳者によって、訳文の雰囲気が違う、センスが異なる、美しいところをそれぞれに感じる。これが本当の翻訳であろう。同じ原典でも、翻訳者によって違う表現は当然ではないだろうか。つまり外国語でも一首の和歌としても、訳者によって表現が違うはずである。ここで参考のため、今まで四種しか見えない英訳『源氏物語』では、如何に前掲した和歌を翻訳されたのか。四種の A、B、C、D としての訳文を取り上げてみたい。わかりやすくするため、もう一度和歌の原文を挙げておく。

【和歌】かぎりとして別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

（桐壺・二三頁）

A アーサー・ウェイリー (Arthur Waley) 訳<sup>(12)</sup>

Though that desired *at last* he come, because I go alone how gladly would I live!

B エドワード・ジョージ・サイデンスティック (Edward G. Seidensticker) 訳<sup>(13)</sup>

I leave you, to go the road we all must go

The road I would choose, if only I could, is the other.

C ロイナル・タイラー (Royall Tyler) 訳<sup>(14)</sup>

Now the end has come, and I am filled with sorrow that our ways must part:

the path I would rather take is the one that leads to life.

D デニス・ウォッシュバーン (Dennis Washburn) 訳<sup>(15)</sup>

Now in deepest sorrow as I contemplate

Our diverging roads, this fork where we must part

How I long to walk for path of living

右 A、B、C、D の訳文を見てみると、同じ和歌でも、四種の訳文はそれぞれが違うことは一目瞭然である。A は、一行として、登場人物の会話のセリフとして翻訳している。B は、二行である。一行は二行より短い。C も二行であるが、一行が二行より長い。D は一行ではなく、二行でもではなく、三行になっている。それぞれの翻訳したりズムがしつかり各自の翻訳の特徴を表している。

以上のように、現代日本語訳と英訳から考えて、中国語訳の場合、日本の和歌は必ずしも七言の詩句を翻訳とは言えないだろう。訳者の踏襲ではなく、もっと積極的に原典から翻訳することが必要であろう。

## 六 おわりに

本稿は、十種類の中国語訳『源氏物語』を取り上げて、桐壺巻における「野分」、「籠物」、「唐櫃」及び一首の「和歌」を合わせて、原文と訳文を考察してきたのである。その結果、まず古語に対して、中国語訳文は適切とは言えないと思われる。また十種類の翻訳を比べたところ、お互いの訳文を踏襲している表現を明らかにしたのである。十種類の訳書があるが、実に翻訳したものは「一豊訳」と「二林訳」である。だが、「一豊訳」は、日本語現代訳の影響が見える。「二林訳」は古語「野分」を省略したことが見える。また「七葉訳」は、最初に自らの独自の翻訳が見えるが、和歌の場合、やはり踏襲した文になってくる状況が見える。他の訳は、「一豊訳」を踏襲して敷衍のものであるこ

とは明らかである。日本現代語訳と英訳を比べてみると、中国語訳の実態は、踏襲を重ねるのが激しい。もっと正確で本格的な新しい中国語訳『源氏物語』が必要であろう。

〔注〕

- （１） 本稿の論点は中国語訳『源氏物語』における訳者の踏襲する問題である。『源氏物語』本文に関する中国語訳についての研究は、以下の代表的な論文を参考いただきたい。①山田利博「豊子愷による『源氏物語』中国語訳について」「平安文学の交響」（勉誠出版 二〇一二）。②笹生美貴子「豊子愷訳『源氏物語』における注釈態度―谷崎潤一郎『源氏物語』（旧訳）の位置付けをめぐって―」（『東洋研究』（大東文化大学東洋研究所 二〇一七）。十種類の中国語訳『源氏物語』訳者と出版社について、次の通りである。「一豊訳」豊子愷『源氏物語』（上）（中）（下）（人民文学出版社 二〇〇三）、「二林訳」林文月『源氏物語』（一）（二）（三）（四）（台湾洪範書店 二〇〇〇）、「三殷訳」殷志俊『源氏物語』上下（遠方出版社 一九九六）、「四梁訳」梁春『源氏物語』上下（雲南人民出版社 二〇〇二）、「五姚訳」姚繼中『源氏物語』（深圳報業集團出版社 二〇〇六）、「六鄭訳」鄭民欽『源氏物語』上下（北京燕山出版社 二〇〇六）、「七葉訳」葉渭渠・唐月梅『源氏物語』壹貳叁（作家出版社 二〇一五）、「八喬訳」喬紅偉『源氏物語』（上）（下）（北方文芸出版社 二〇一六）、「九潘訳」潘蕊『源氏物語』（上）（下）（吉林大学出版社 二〇一六）、「十王訳」王珊珊『源氏物語』上下（群言出版社 二〇一七）。
- （２） 張龍妹「前言」北京日本学研究中心文学研究室編『世界語境中的《源氏物語》』（人民文学出版社 二〇〇四）一～三頁。

- (3) 谷崎潤一郎『谷崎潤一郎訳源氏物語』全（中央公論社 一九八七）八頁。
- (4) 与謝野晶子『源氏物語』（角川文庫 二〇〇六）一二頁。
- (5) 佐成謙太郎『対訳源氏物語』（明治書院 一九五一）一〇頁。
- (6) 前(3)同、九頁。
- (7) 前(4)同、一二頁。
- (8) 前(5)同。
- (9) 前(3)同、一二三頁。
- (10) 前(4)同、二八頁。
- (11) 前(5)同、二八頁。
- (12) Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, translated by Arthur Waley, 6. Tokyo: Tuttle Publishing, 2010.
- (13) Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, translated by Edward G. Seidensticker, 6. New York: Knopf, 2006.
- (14) Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, translated by Royall Tyler, 5. New York: Penguin, 2003.
- (15) Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, translated by Dennis Washburn, 6. New York: Norton, 2015.

The Boom in Chinese Translations of *The Tale of Genji*, with  
Focus on the Kiritsubo Chapter

ZHANG Peihua

*The Tale of Genji* (*Genji monogatari*) is among the foremost classics of Japanese and world literature. It has been translated into many European and Asian languages. In recent years, a variety of new translations of *The Tale of Genji* have appeared in Chinese, more than doubling the number of translations found in English. Thanks to the economic development of China, the binding and physical quality of Chinese books has improved. But what can be said about the quality of the translations that have appeared one after another? To answer this, I select ten Chinese translations of *The Tale of Genji* (published by the end of 2018) to elucidate the details of situations, including problems in Chinese translations. I focus on the Kiritsubo section of these translations.